

## 学修成果に係る自己評価に関する卒業時アンケート（2019年度）集計結果 国語国文学科

## 回収結果

学部	文学部				人間総合学部				合計
学科	国語国文	フ語フ文	英語英文	学部計	児童文化※	発達心理※	初等教育	学部計	
回答数	92	115	99	306	65	53	72	190	496
卒業生数	95	117	106	318	65	54	72	191	509
回答割合	96.8%	98.3%	93.4%	96.2%	100.0%	98.1%	100.0%	99.5%	97.4%

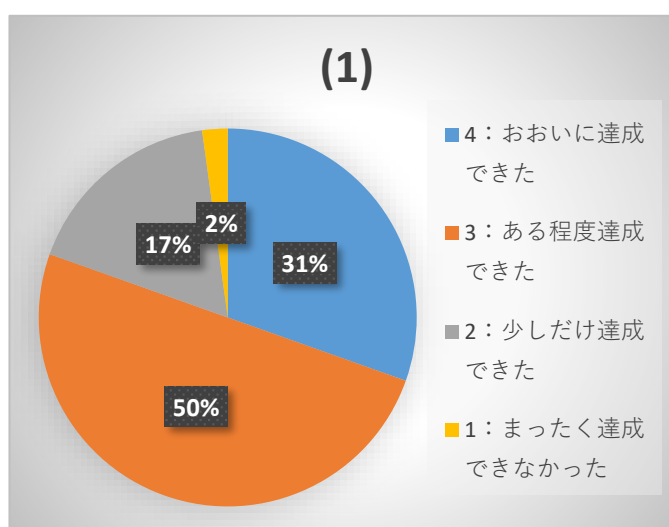
※文学部児童文化学科卒業生1名を含む

卒業生数には2019年9月卒業生、2020年3月卒業生を含む

（1）時代を超えて普遍的に求められる豊かな人格形成をおこなうために、カトリックの人間観・世界観を理解するための基礎的な能力を身につけている。

4：おおいに達成できた	28
3：ある程度達成できた	46
2：少しだけ達成できた	16
1：まったく達成できなかった	2

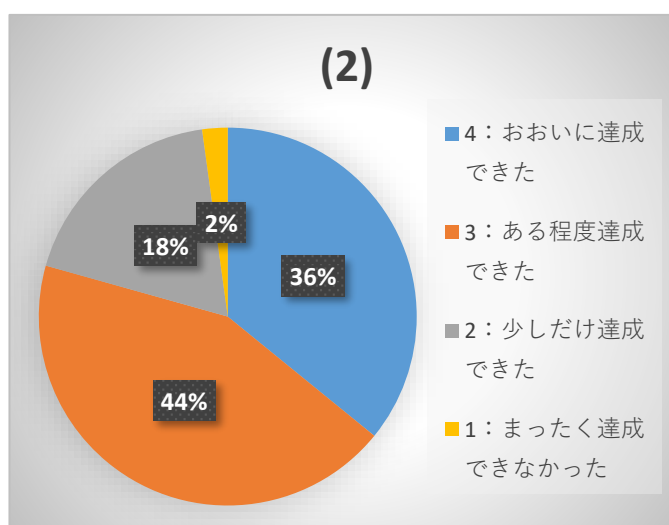
92



（2）時代を超えて普遍的に求められる深い教養と知性、自己を発見する心を持つ自立した女性になるための基礎的な能力を身につけている。

4：おおいに達成できた	33
3：ある程度達成できた	40
2：少しだけ達成できた	17
1：まったく達成できなかった	2

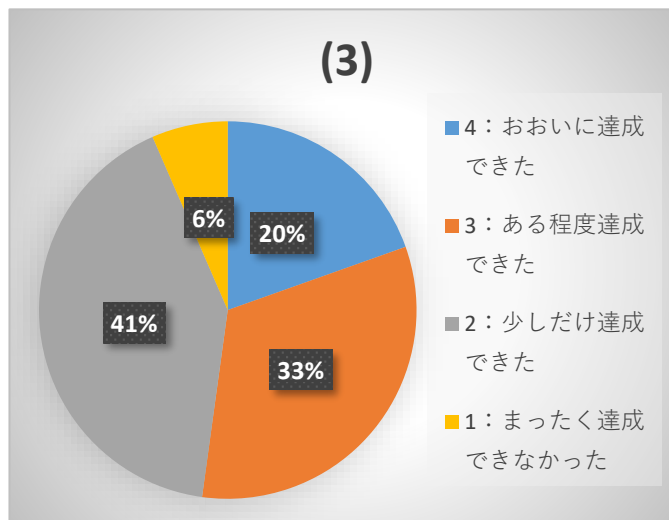
92



### 学修成果に係る自己評価に関する卒業時アンケート（2019年度）集計結果 国語国文学科

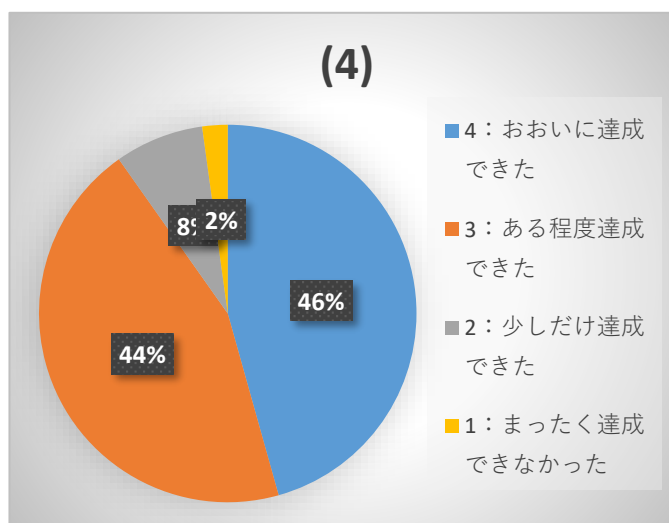
（3）現代社会に求められる外国語学習を通じ、異文化への深い理解のために必要な能力を身につけている。

4：おおいに達成できた	18
3：ある程度達成できた	30
2：少しだけ達成できた	38
1：まったく達成できなかった	6
	92



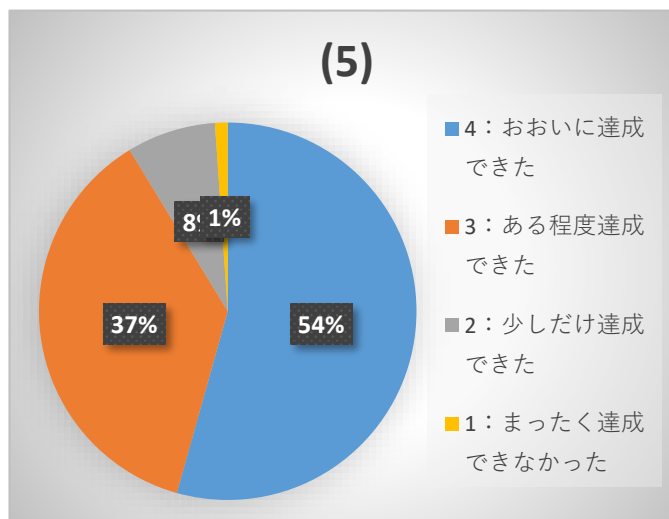
（4）専攻する言語と文学、文化に関して、専門的な知見と技能を身につけている。

4：おおいに達成できた	42
3：ある程度達成できた	41
2：少しだけ達成できた	7
1：まったく達成できなかった	2
	92



（5）専攻する言語や文学、文化について、特定の問題を掘り下げ、自ら調査、研究して考えをまとめることができる。

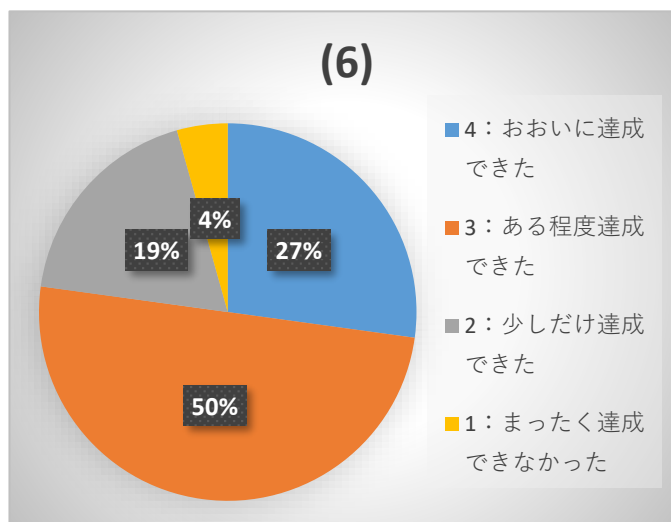
4：おおいに達成できた	50
3：ある程度達成できた	34
2：少しだけ達成できた	7
1：まったく達成できなかった	1
	92



## 学修成果に係る自己評価に関する卒業時アンケート（2019年度）集計結果 国語国文学科

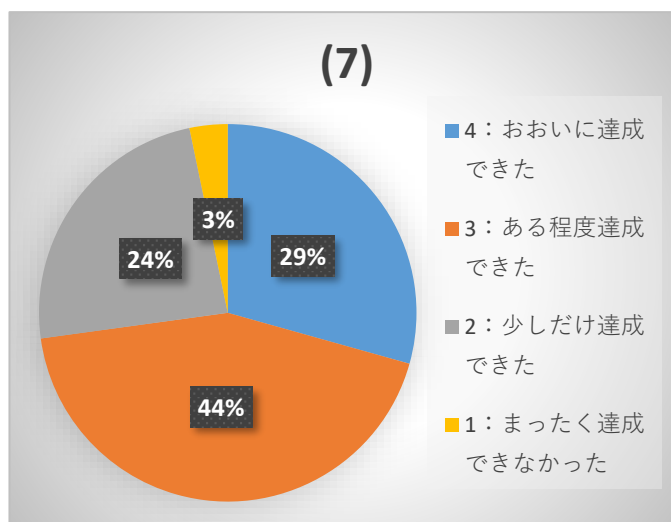
(6) 専攻する言語について、高度なコミュニケーション能力を身につけている。

4：おおいに達成できた	25
3：ある程度達成できた	46
2：少しだけ達成できた	17
1：まったく達成できなかった	4
	92



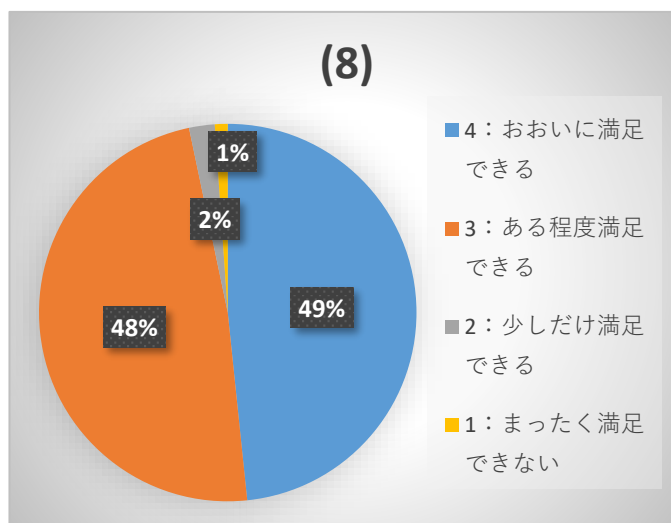
(7) 異文化と自文化とを見渡す豊かな教養をもとに、多様な人々と協働し、対話する能力を身につけている。

4：おおいに達成できた	27
3：ある程度達成できた	40
2：少しだけ達成できた	22
1：まったく達成できなかった	3
	92



(8) 大学4年間の学修を通じて、あなたは満足いく成果をあげたと感じますか。

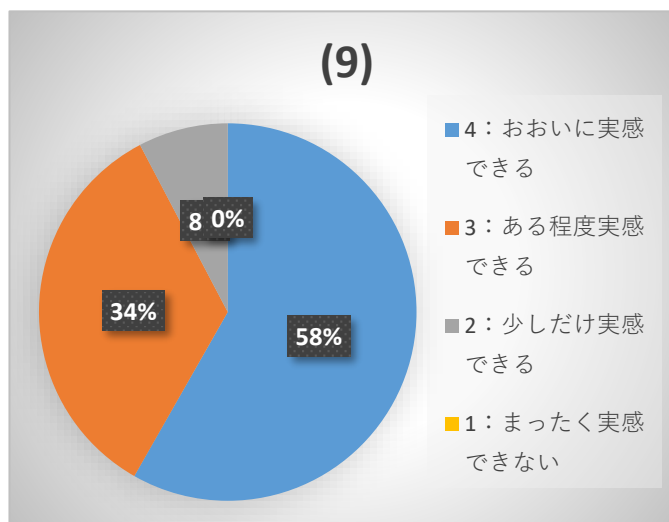
4：おおいに満足できる	44
3：ある程度満足できる	44
2：少しだけ満足できる	2
1：まったく満足できない	1
	91



## 学修成果に係る自己評価に関する卒業時アンケート（2019年度）集計結果 国語国文学科

(9) 大学4年間の学修を通じて、あなたは自分が成長したと実感しますか。

4：おおいに実感できる	53
3：ある程度実感できる	31
2：少しだけ実感できる	7
1：まったく実感できない	0
	91



## 2019年度卒業時アンケートに関する考察（国語国文学科）

国語国文学科での4年間の学びを終え、ディプロマポリシーから設定された質問に沿って、自己の成長を達成感や満足度から振り返るアンケートであった。回答の選択肢「大いに達成できた」、「ある程度達成できた」の合計の数値を一つの基準として見てみると、どの項目もおおよそ75%以上となっており、ほとんどの学生が達成感を得て卒業できたことがわかる。特に数値が高かった項目は、「(4) 専攻する言語と文学、文化に関して、専門的な知見と技能を身につけている」(90%)、「(5) 専攻する言語や文学、文化について、特定の問題を掘り下げ、自ら調査、研究して考えをまとめることができる」(91%)の2項目であった。この要因として考えられるのは、国語国文学科という学科の特徴である、日本語を使って高校までの学びに積み重ねるようにより上を目指して深く学んでいけることが挙げられる。国語国文学科では4年間の集大成として卒業論文が必修科目に設定されていることも大きいだろう。卒業論文の作成を通して、達成感や自己の成長を感じることは多いと思われる。

一方で、比較的数値が低かった項目は、「(3) 現代社会に求められる外国語学習を通じ、異文化への深い理解のために必須な能力を身につけている」(53%)、「(7) 異文化と自文化とを見渡す豊かな教養をもとに、多様な人々と協働し、対話する能力を身につけている」(71%)の2つであった。この要因は、国語国文学科の学生にとっては「外国語学習」はしているが専門ではないとの認識があったのではないと思われる。「異文化」ということばが外国語（英語）学習を連想させることから、自分は達成できていないと考える学生がいたとしてもおかしくない。確かに、本学科の学生では英語が苦手な学生はいるが、留学する学生も少ないながらもいることは事実であり、また、異文化に触れる機会がないわけではない。異文化理解は外国語学習を通してしかできないことではないこと、古典文学もある意味異文化である、というようなことが理解されれば、数値は改善されると思われる。

以上のような点はあるものの、全体を通しておおむね評価は高く、最後の質問項目である「(8) 大学4年間の学修を通じて、あなたは満足いく成果をあげたと感じますか」については99%が満足したという結果であった。つまり、ほぼすべての学生が国語国文学科での学修、学生生活に満足して卒業していったということになる。白百合の国語国文学科で学んだことは、将来に生かせる内容であったと学生からは評価されていると解釈してよいだろう。